『北越雪譜』（鈴木牧之著）

最近は山関係の新刊本を読むことが少なくなった。新しいトピックスに関心が無くなったというか、付いて行けなくなったというか、いずれにしてもそんなところであろう。淋しいことではあるが、これはこれで事実であるから致し方ない。

さて、ここで紹介する本は古いも古い、200 年ほど前に書かれた本であるが、90 年近く前に活字本としては初めて発行された岩波文庫本が現在第 71 刷本として現在も増刷されていることからも分かるように、今でもその内容は新鮮に感じられる。

（岩波文庫本が出る前は江戸時代の木版刷で読まれていたらしい）。

この本は、鈴木牧之という上越の江戸時代の一商家（質屋兼問屋兼銀行業の地方豪商）が自分の生まれ育った・南魚沼地方の豪雪と、そこで雪と闘い、雪と共に生き、雪の中で死んで行く里人の風俗・習慣・生活を珍しい挿画を交えて紹介したもので、江戸時代の雪国百科全書ともいうべきものであろうか。

著者は、同じ雪国でもこの地域の豪雪は温暖な地域での雪と異なり、それゆえに雪国での生活や習慣も温暖な地域では想像もできないような様相になるので、温暖な他所で生活している諸氏への話題として著したと書いている。

この本の舞台になっている上越には、越後三山、谷川連峰、苗場山や岩菅山などがあり、また尾瀬にも近いので山に親しんでおられる皆さんにはお馴染みの土地であろうが、８ケ月間も続く豪雪の穴倉での里人の暮らしぶりは我々には珍しいものではなかろうか。

古い時代の日本行脚紀行には、イザベラ・バード「日本奥地紀行」などの外国人による見聞録や、松尾芭蕉、菅江真澄などの文人墨客による遊覧記も著名であるが、これらは他国からの旅行者の目で見た見聞録であり外から見た道中記であるから、内側から見て書かれたこの「北越雪譜」とは性格が異なる。

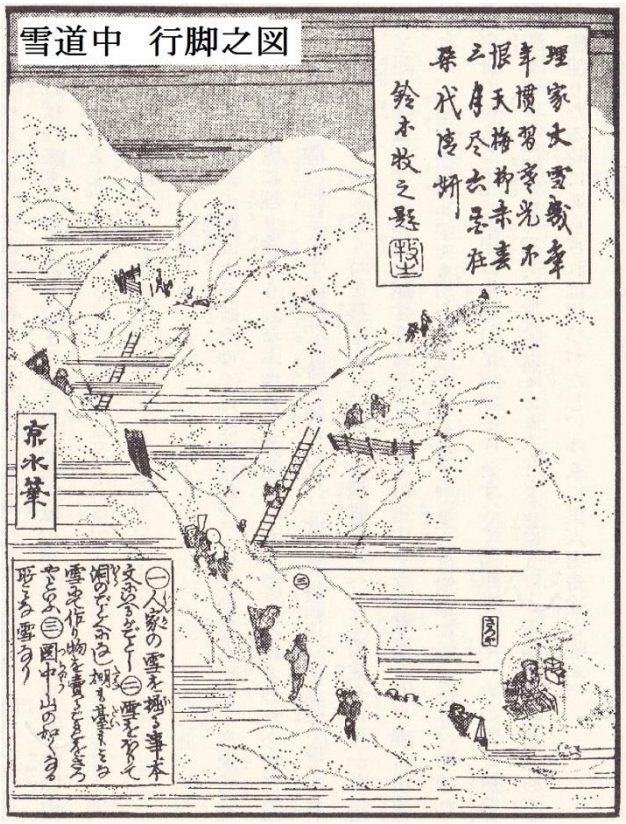
能書きはこのくらいにして、まずは挿画を見て頂く方が手っ取り早いであろう。

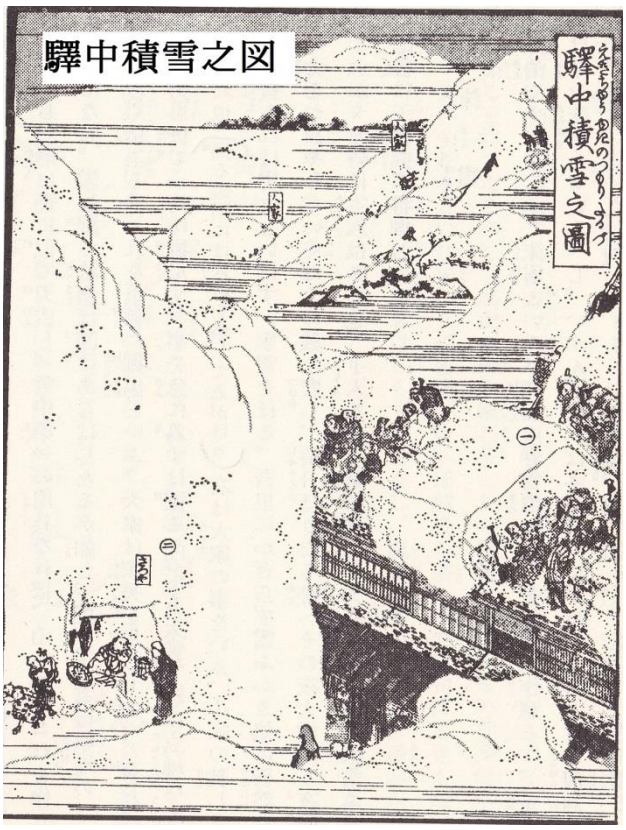
左側の図は雪堀り（除雪）、右側は屋根の雪下しの図である。我々は除雪を「雪下し」と言うが、雪国では「雪掘り」と呼んで、「除雪」などという生易しい作業ではなく、「雪を掘る」という重労働を表現しているそうだ。

左の絵で大きな雪塊を縄で引っ張っている姿がこのことを表わしている。

次に示した図は雪中の道中の様子である。右側の図は当時の宿駅（○○ノ宿（しゅく））付近の様子である。

小さくて見づらいが、左下に掘られている雪穴（雪洞）は今でいう道中コンビニであろう（「さろや」と注記されている）。左側の図には山道を登って行く旅姿が描かれており、画面中央付近には梯子と雪崩防止柵が見えるのは、今でも湯檜曽や土樽辺りの雪の斜面でお馴染みの景色であろう。

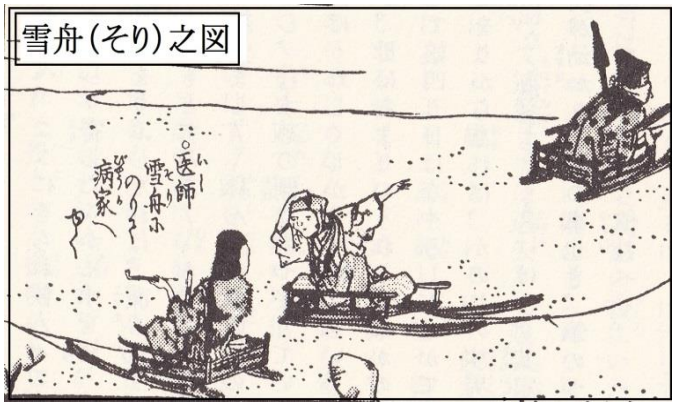




挿画に描かれている雪道具も現在使用されている物と似たような物で、雪国ならいつの世でもどの国でも人間が考え出すことは似たようなものだと感心させられる。

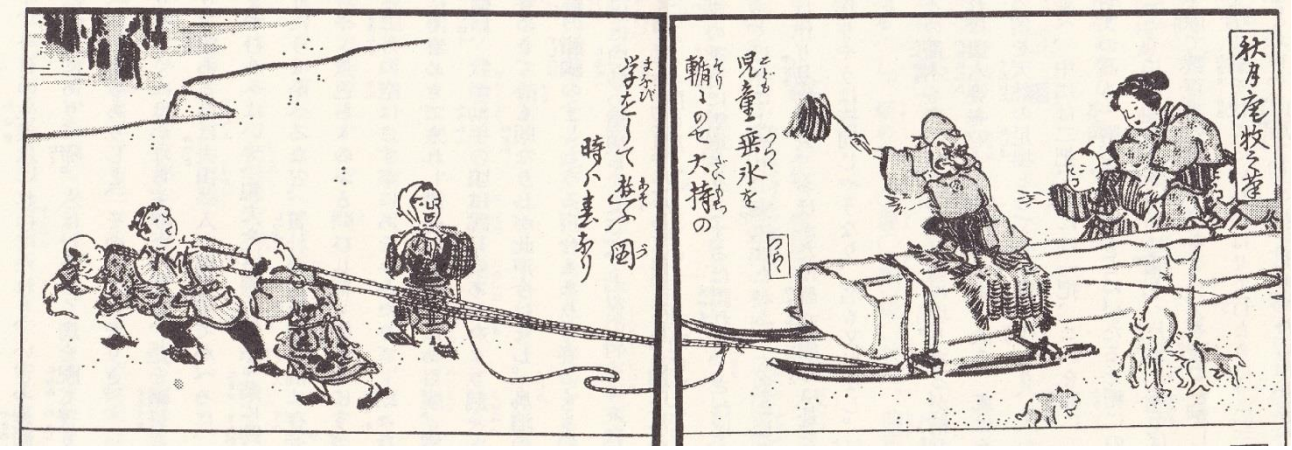
右の図は今でも上越の登山者に愛用されているカンジキである。木の枝を束ねて曲げて蔓で縛った物である。往時は「かじき」と称したと書いてある。その右（すかり）はちょっと変わっているが、今で言うスノーシューであろう。スノーシューの爪先を紐で持ち上げているのが泣かせる。鉄（カネ）カンジキ（今のアイゼン）については、下駄の裏に釘を打ったものを履いたと書かれている。

右のそり（雪舟）は往時の運転手付マイカーであろう。或いはタクシーでもあったか。図には「医師雪舟にのりて病家へゆく」との注記が読める。



次頁に示した橇は同じそりでも重量物を運ぶ橇で「輴（そり）」と書かれている。村の子供が遊

びがてら橇引きの練習をしている絵で、積んでいるものは大きな氷柱（つらら）である。この橇の大型の物を「修羅」と言い、神社仏閣などを建てる時の大材木や大石を運んだそうだ。京都本願寺の普請の際には径 5 尺・長さ 10 丈に伐り出した欅を雪が凍るのを待って南魚沼の山から搬出したという。



本書の内容は、豪雪地帯の雪中での暮らしや風俗の描写もさりながら、雪自体の観察眼も鋭く、我々雪山に登る者にも参考になる記述も多い。その一例を挙げれば、降ってくる雪の結晶や降り方も季節や天候によって異なることが記述されていて、雪の結晶については験微鏡で観察したという 35 種類の結晶が図解されており雪の大家・中谷宇吉郎博士も顔負けではなかろうか。また、雪崩についても、全層雪崩（雪頽（ナダレ））と表層雪崩（泡（ホウ））の区別がちゃんとなされているのには脱帽せざるを得ない。

雪国ならではの雪崩事故や雪崩洪水事故で集落が埋まってしまったり、天保の大飢饉で村全部が餓死・消滅したり、山中の家の一家全員が狼に食い殺されたりという悲惨な事故が沢山書かれているが、その中でも下記の悲劇は涙無くしては読めなかった。

ある風雪の吹き荒ぶ寒い夜に、渓谷の上流迄上ってきた鮭を断崖絶壁から藤蔓で吊り下げた狭い座板に立って掬い取る掻網という漁法で捕っていた漁師が、夫の身を案じて迎えに来た女房が「今宵はもう遅い。暖かい晩飯も用意してきたし酒も燗して来たので、さ、早く帰ろう」といえば、夫「今宵は豊漁だ。もう少し捕って行くから、先に帰って待っていてくれ」と言う。

女房はそれならと、持ってきた松明を座板を吊るした藤蔓に挟んで先に帰ったが、待てど暮らせど夫は帰って来なかった。不思議に思い真夜中に再び現場に行ってみると、先程藤蔓に挟んでいた松明の炎が座板を吊るしていた藤蔓を焼き切り、漁師は激流に呑まれて行方不明になっていたのであった。これを見た女房は涙を流して嘆き悲しみ激流に身を投げんとしたが、家で待っている老いた姑と幼き子供を養う者も無く路頭に迷って乞食になっている姿が目に浮かび、死ぬにも死ねない身になるかな、「許し給え、我が夫」と雪にひれ伏し、声を上げて哭きに泣きけり、云々・・・。

文体は古文で書かれているが昔の漢字にはルビがふられているので読み易い。諸処に挿入された挿画も一服の清涼剤である。騙されたと思ってコロナ禍の暇潰しにでも一読をお薦めしたい。

岩波文庫（黄帯・日本文学古典）　本体 970 円　　（酎　2020 年　記）